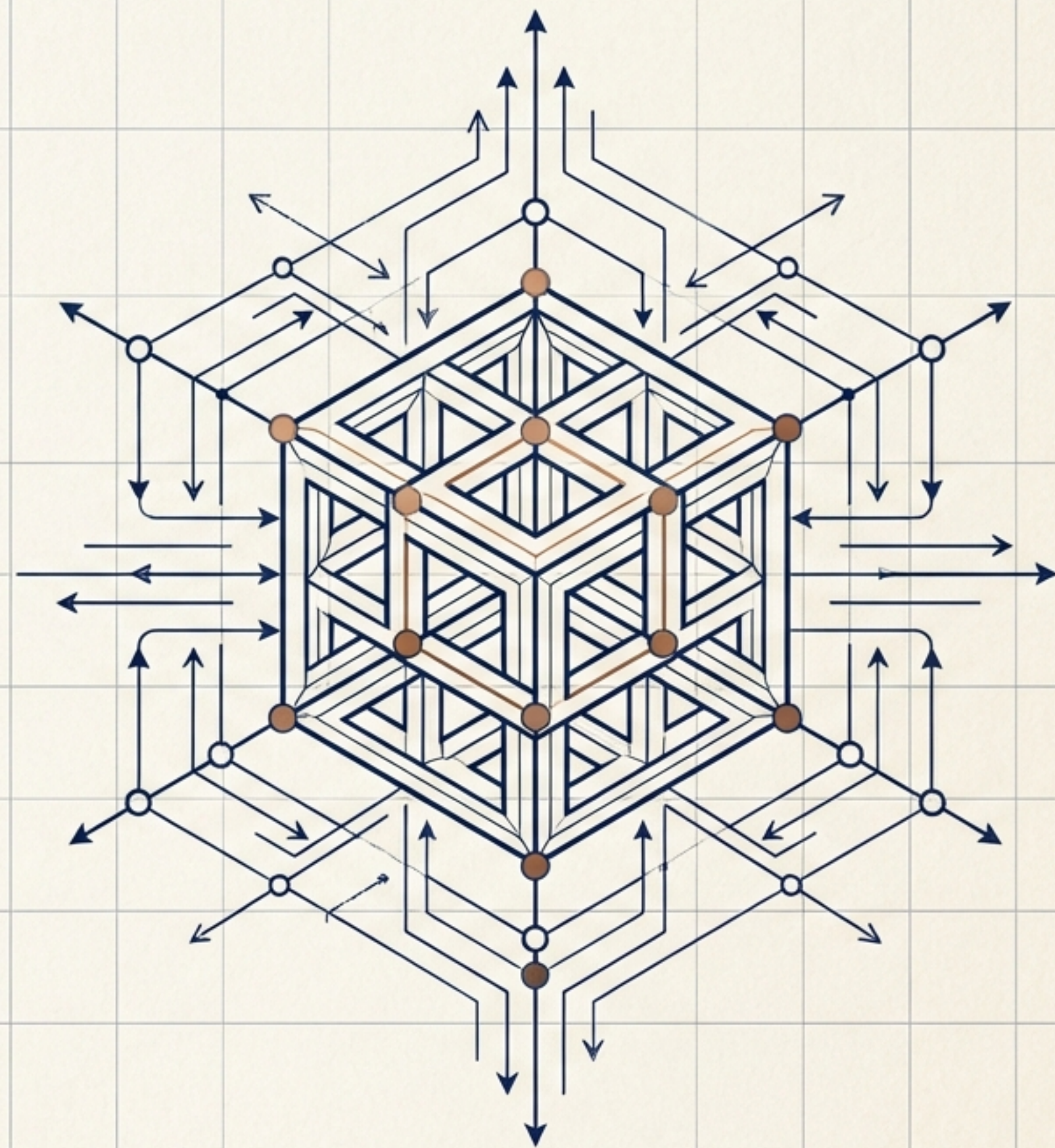


知財DXの設計図 2026

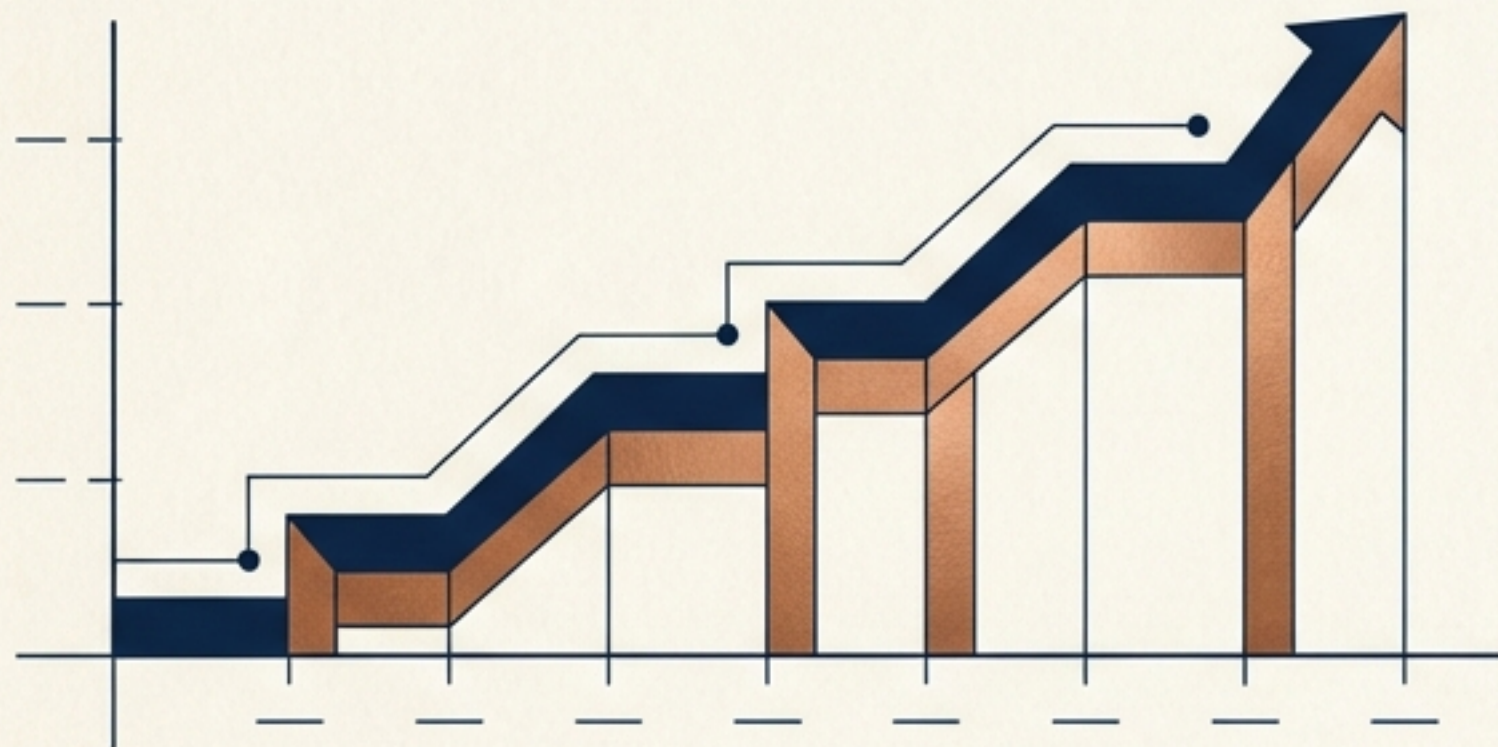
知財部門業務の効率化・高度化に向けたAI活用アプローチ比較検討

生成AIから自律型AIエージェントへの
パラダイムシフトをどう実装するか



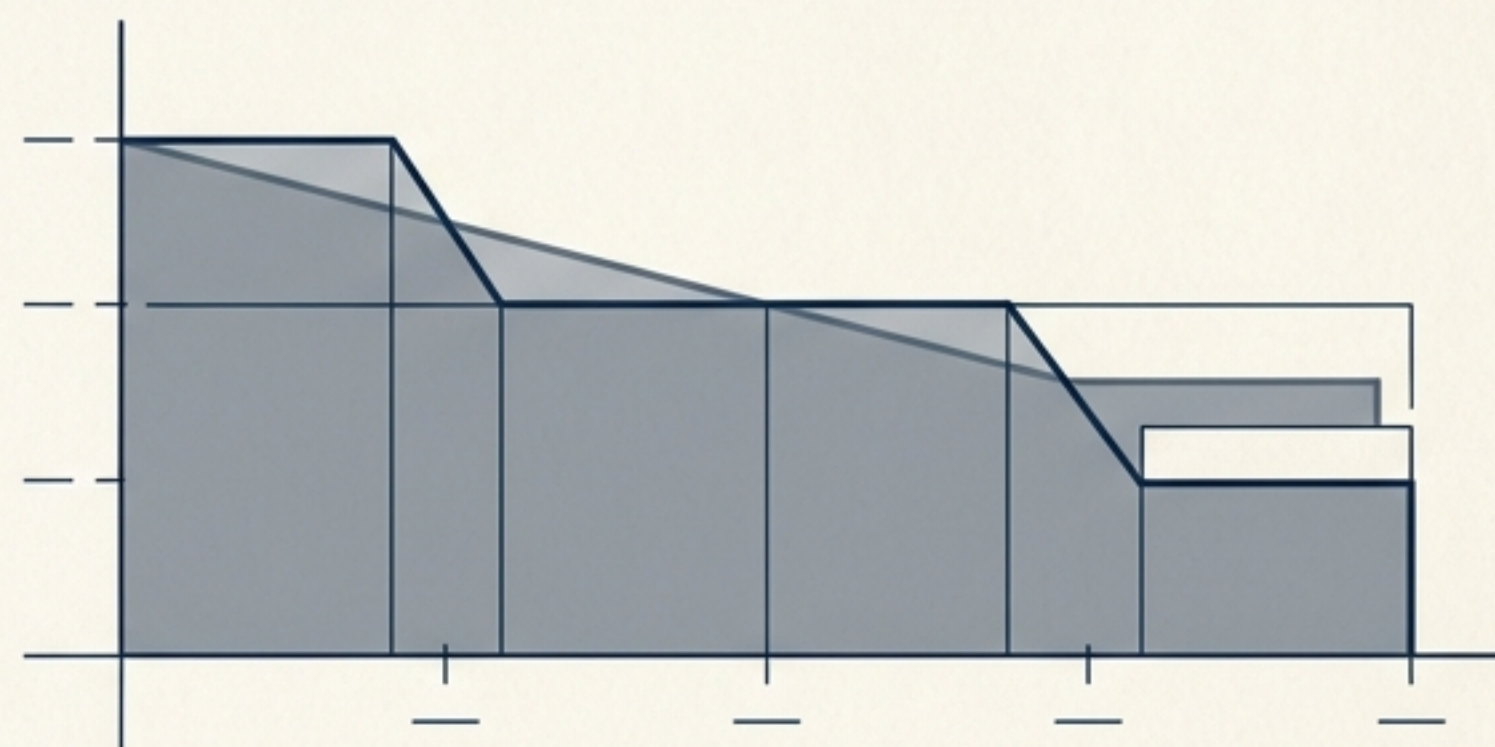
構造的限界:労働集約型アプローチの終焉

要求の高度化



- グローバル化による出願・対応案件数の爆発的増加
- 事業側から求められる、より高度で複雑な特許網の構築

リソースの枯渇



- 深刻な知財専門人材の不足と採用難
- 一人あたりの業務負担の限界突破

労働集約的な実務（特許調査、明細書作成、中間処理）からの脱却は、もはや「選択肢」ではなく事業継続のための「必須要件」である。

2026年のパラダイムシフト： ツールから「自律型エージェント」へ

フェーズ2：対話型生成AI

プロンプトに対する一問一答形式のテキスト生成。人間による常時指示が必須。

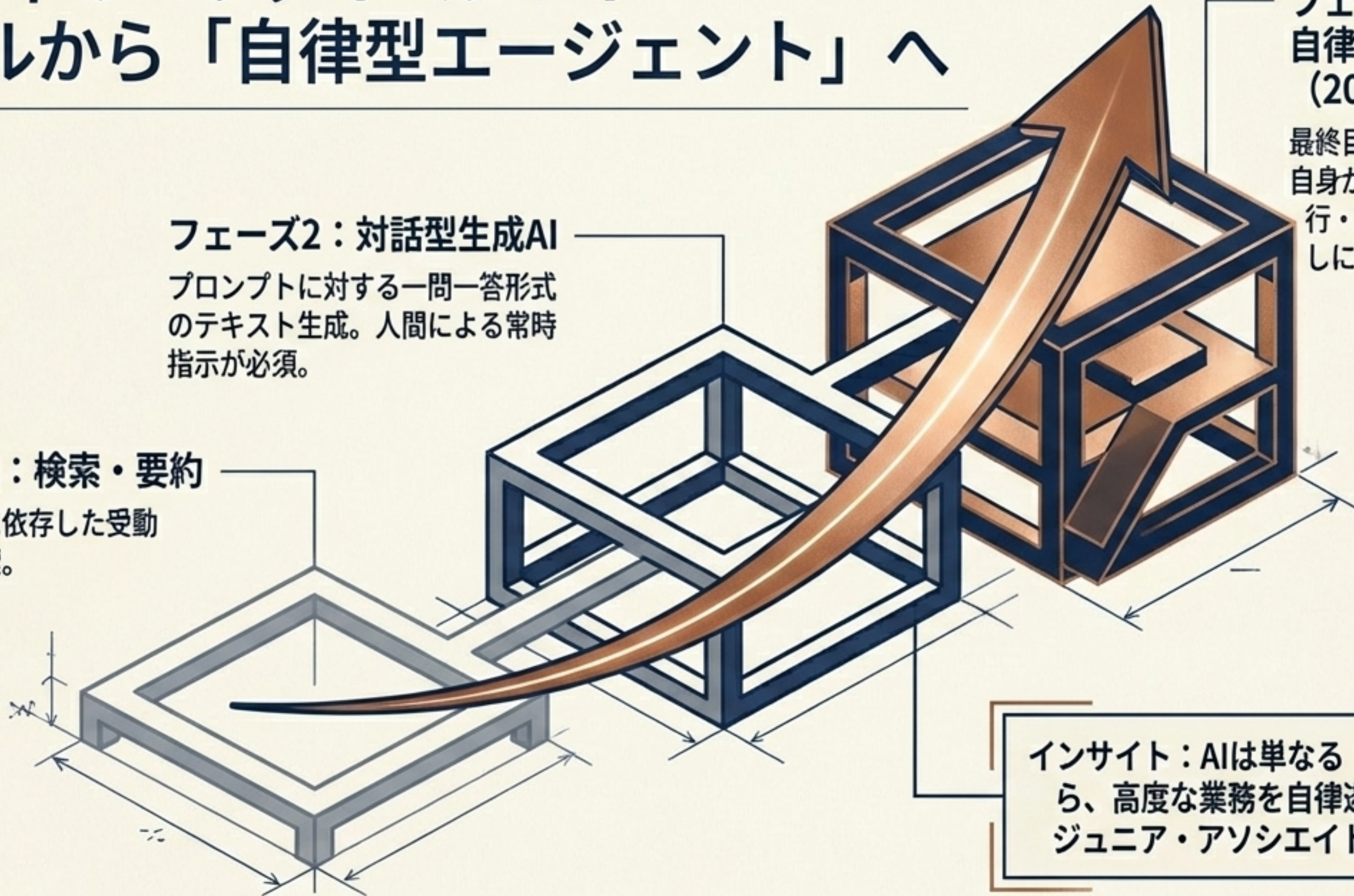
フェーズ1：検索・要約

キーワードに依存した受動的な情報検索。

フェーズ3： 自律型AIエージェント (2026-)

最終目標のみを与えられ、AI自身が計画立案・多段階実行・検証を人間への依存なしに行う。

インサイト：AIは単なる「便利な道具」から、高度な業務を自律遂行する「優秀なジュニア・アソシエイト」へと進化した。



現代の知財業務を牽引する3つの「AIエンジン」



汎用AIエージェント
[Manus]

広範囲な自律実行能力を持ち、非構造化データからの「戦略的探索」に優れる。



コーディング特化AI
[Claude Code]

社内システムと連携し、独自の自動化ワークフローを「独自開発」する特化型。



知財特化型生成AI
[AI Samurai, Patentfield 等]

特許実務に最適化され、堅牢なセキュリティと「即効性」を提供する専用プラットフォーム。

導入目的と許容リスクに応じた診断マトリクス

	汎用AI (Manus)	開発型AI (Claude Code)	知財特化型AI
即効性	●	○	●
導入ハードル	●	●	○
カスタマイズ性	●	●	●
セキュリティ	●	●	●
必要な専門知識	プロンプト技術	プログラミング	知財実務知識

○: 低
●: 中
●: 高

「すぐ効く」特化型か、「化ける」自律型・開発型か。
自社のボトルネックと技術リソースによる使い分けが成功の鍵。

エンジン1：即効性と安全性を担保する「知財特化型生成AI」

堅牢なセキュリティ要件を満たした専用プラットフォーム



優位性：直感的なUI、国内サーバーでの運用、データ自動破棄機能など、知財部門の厳格なセキュリティ・コンプライアンス要件をDay 1から満たす。

工数

50%削減

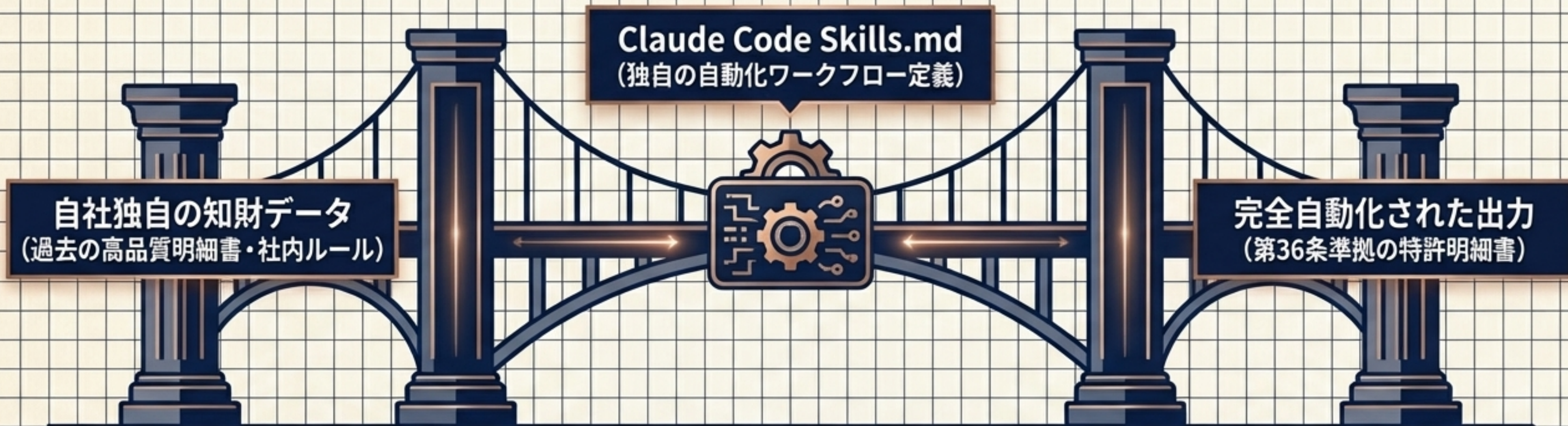
発明届出業務・年間8000万
円のコスト削減効果

出願リードタイム最大

40%短縮

少人数で大規模組織に
匹敵する業務遂行能力

エンジン2：自社専用の知財DX基盤を構築する「Claude Code」



- ・ターミナル上で動作し、業務フローをコードレベルで完全自動化。
- ・欧州特許弁理士試験でLLM最高得点(55/100)を記録した高度な論理推論能力。

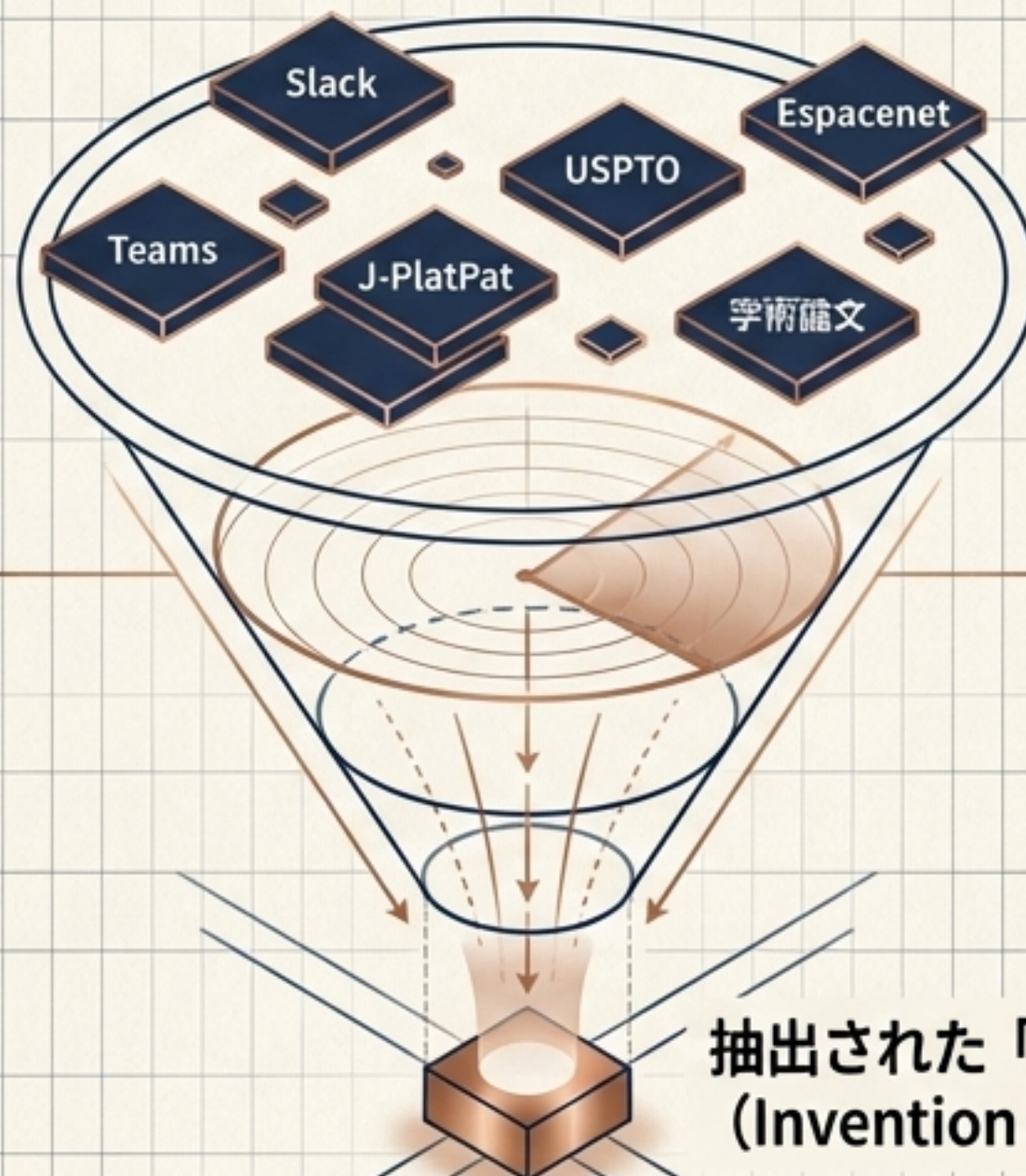
【圧倒的な処理速度の実現】
請求項7項・75段落(約15,000字)の明細書自動生成において、従来の「1~2週間」を「約1時間」へと劇的に短縮。

優位性：自社特有の記載フォーマットや厳密な社内ルールを完璧に再現できる「圧倒的なカスタマイズ性」。

エンジン3：非構造化データから能動的に価値を創出する「Manus」

自律的な横断検索：

人間による監視なしに複数の特許DBや学術サイトを横断・並行検索し、関連文献を抽出しサマリーを自動生成。



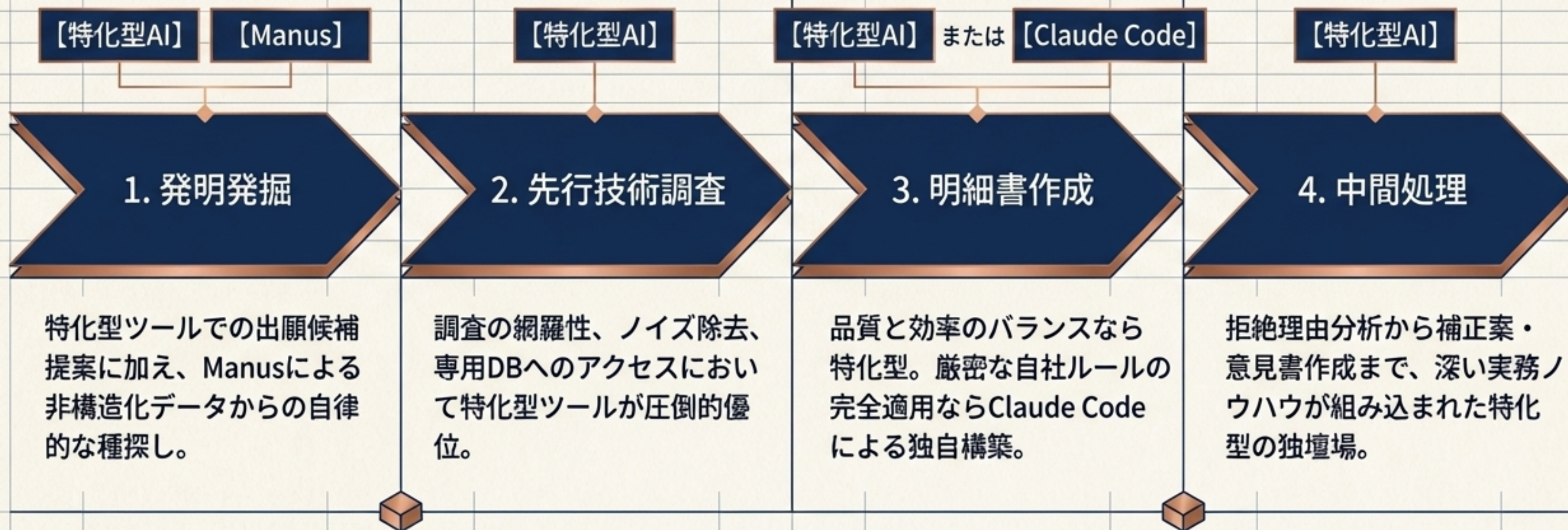
データ駆動型の発明発掘：

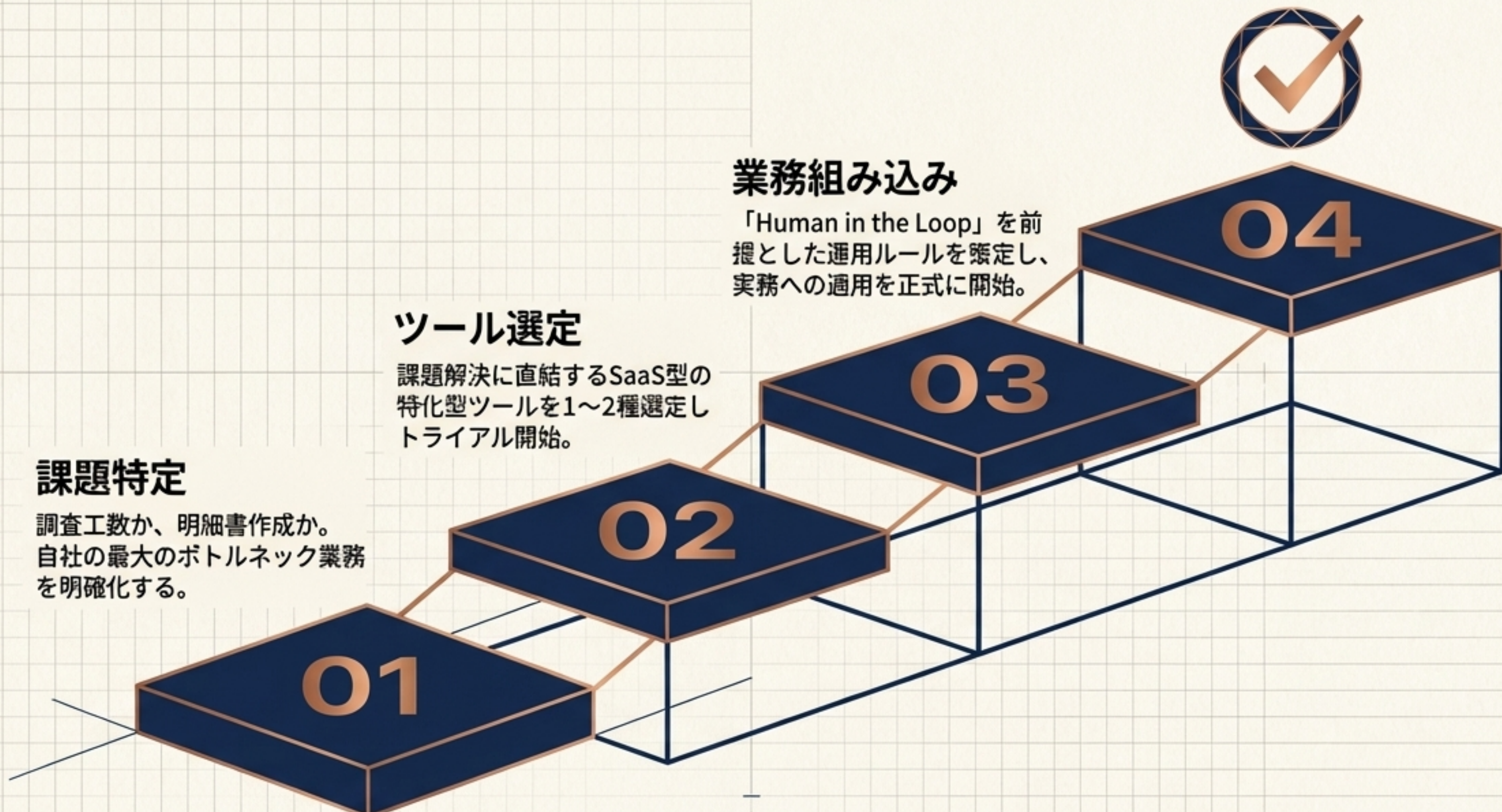
社内コミュニケーションツールを常時セマンティックスキャンし、開発者の議論から発明の概念を能動的に抽出。

抽出された「発明の種」
(Invention Seed)

優位性：キーワード検索の限界を超え、単なる作業代行から「戦略的な情報探索の自動化」へと知財部門を押し上げる。

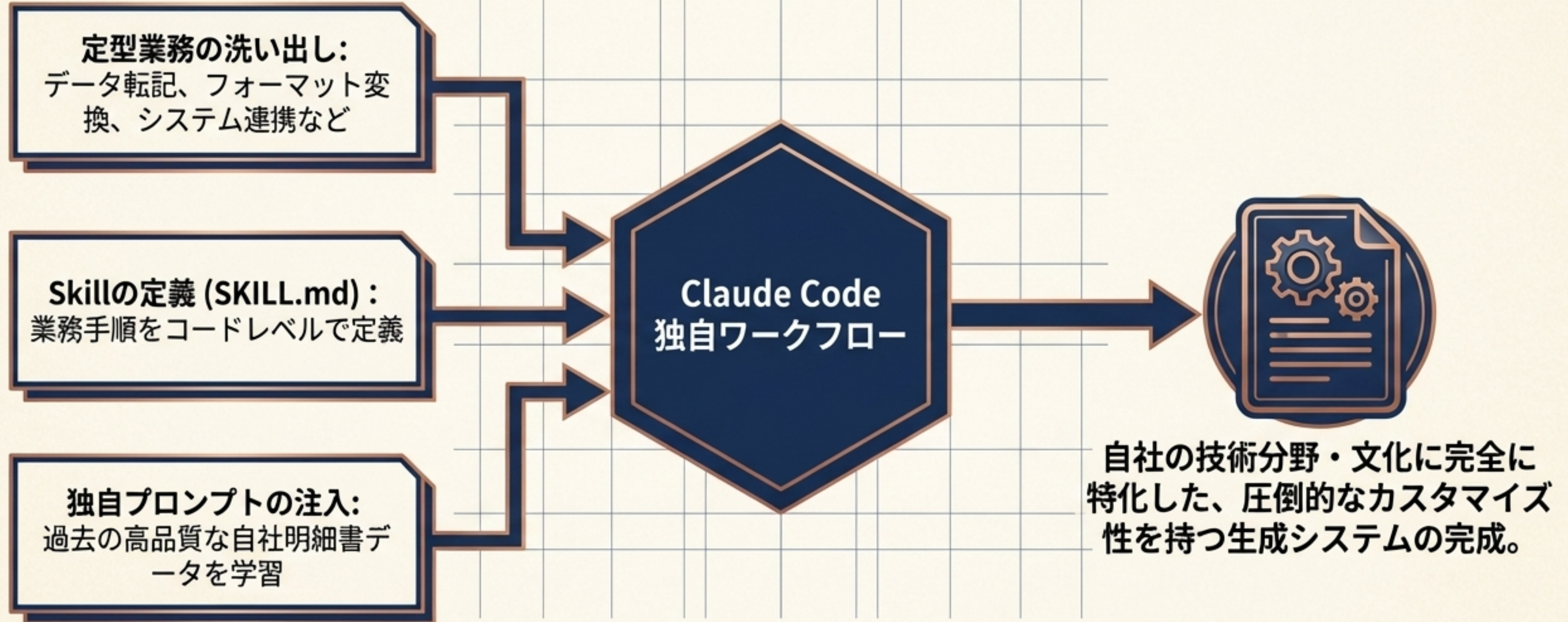
知財ライフサイクルの各フェーズにおける「最適解」の配置



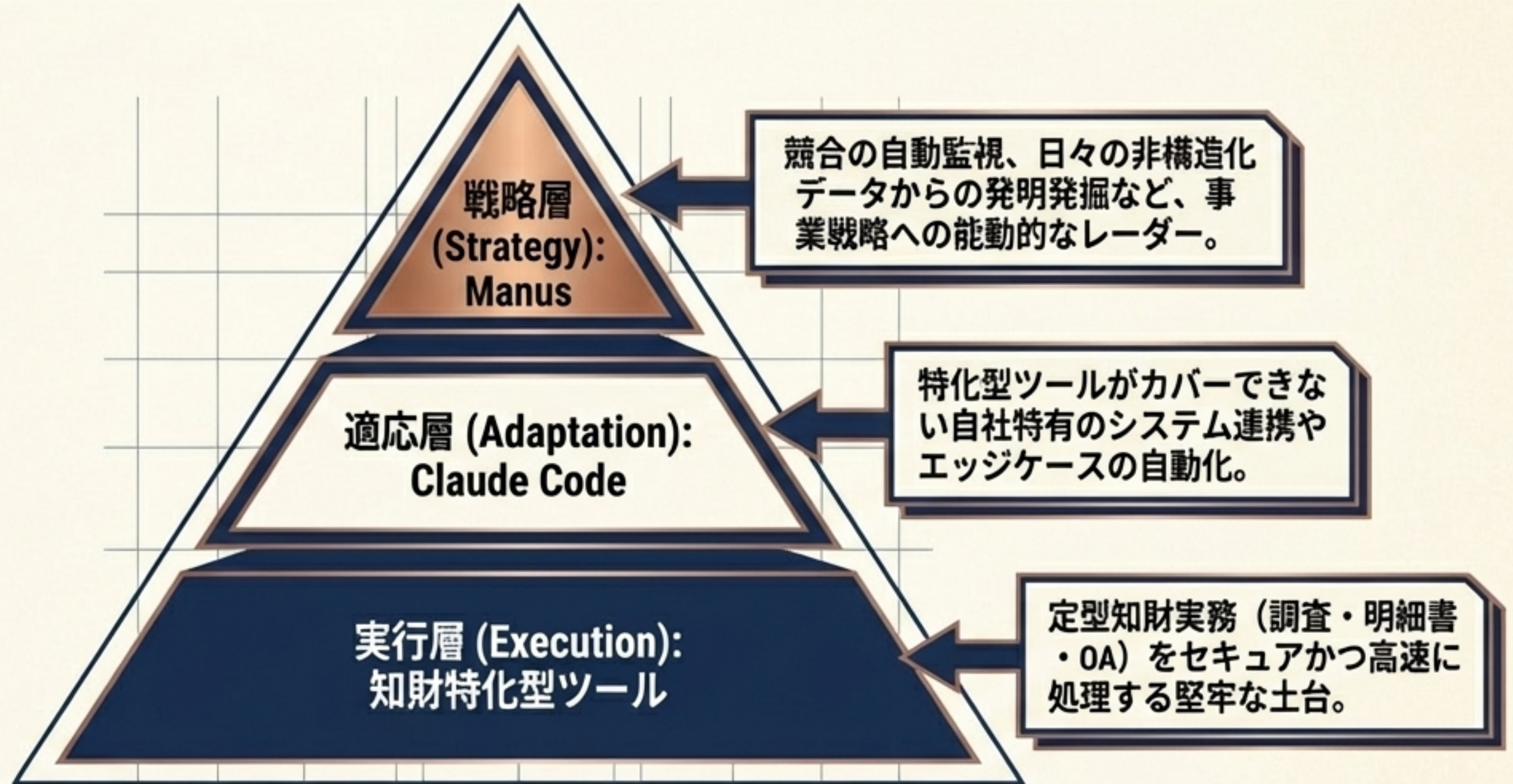


導入シナリオ2：中長期的な競争優位を生む「独自DX基盤構築アプローチ」

戦略：Claude Codeを活用した社内システムの開発



究極のハイブリッド構成：3つのエンジンを統合した「次世代知財スタック」



コアインサイト：知財部門を単なる「特許出願の管理組織」から、事業を牽引する「戦略的ドライバー」へと昇華させる完全形態。

リスクマネジメント：機密情報の保護とハルシネーションの制御

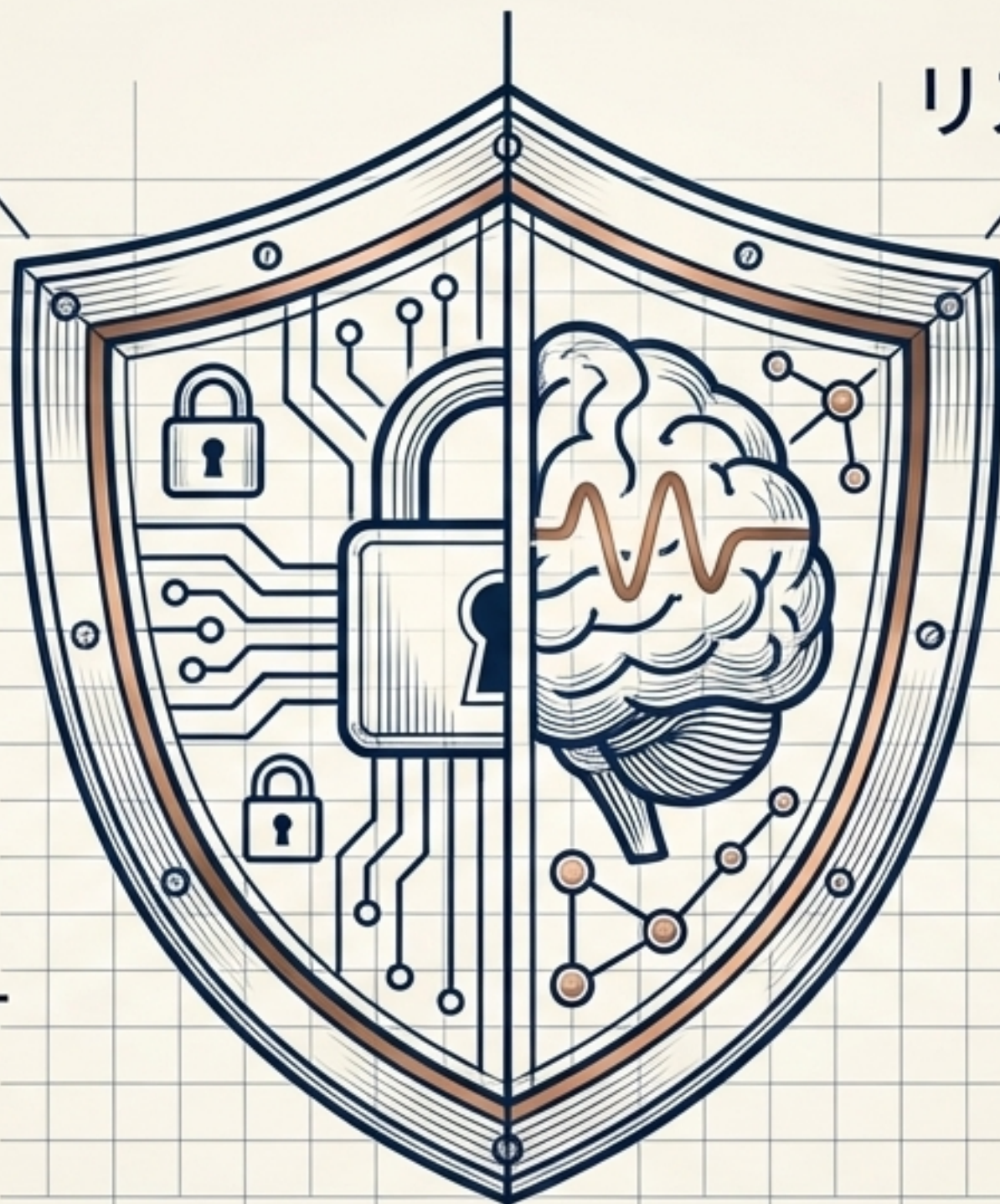
リスク1：機密情報流出

脆弱性:

未公開発明の入力による意図せぬ学習データ化。

対策 (Mitigation):

- ツールのセキュリティポリシーの厳格化
- 「国内サーバー運用」「学習データ利用のオプトアウト」「データ自動破棄」を具備した特化型ツールの選定。



リスク2：ハルシネーション

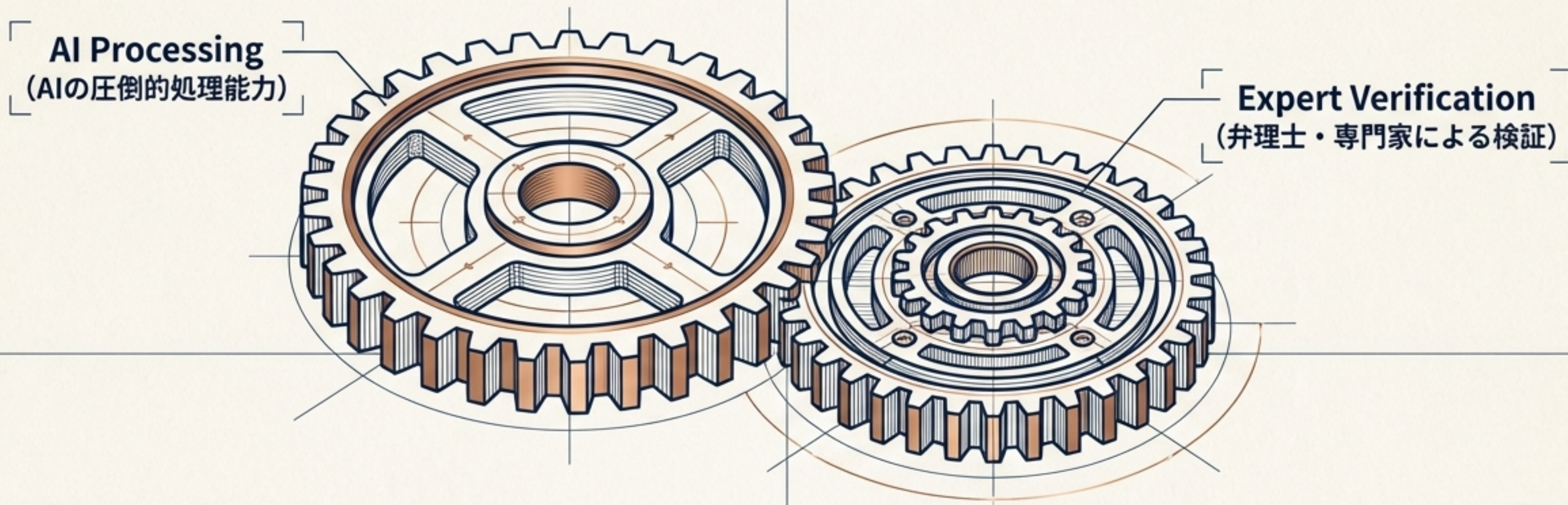
脆弱性:

AIによる「もっともらしい嘘」や技術パラメータの捏造。

対策 (Mitigation):

- 権限の制限とルール化
- 特許明細書の「独立クレーム作成」や「精密な技術パラメータの最終決定」は、絶対にAI単独で行わせない。

「Human in the Loop」の絶対要件：AIと専門家の連動方程式



[AIの処理能力] × [専門家による検証] = 圧倒的な特許品質

リテラシー教育への投資

最高峰のツールも、適切なプロンプト設計と出力の真偽判定ができる「人間」がいなければ機能不全に陥る。所内での継続的なAIリテラシー教育が導入成功の最大の鍵となる。

即時の効率化と中長期の戦略的進化に向けた3つのアクション

結論：

即座の業務負担軽減には「知財特化型ツール」を。知財機能の戦略的昇華には「Manus / Claude Code」のハイブリッド実装を。

01

自社のボトルネック業務を1つ特定する
調査か、ドラフトか。最も工数が逼迫している領域を可視化する。

02

特化型ツールのトライアルを開始する
過去の完了案件を用い、自社の求める品質基準とAIの出力をベンチマーク検証する。

03

人とAIの協働プロセス（HITL）を設計する
「誰が」「どの段階で」AIの出力を検証するか、運用ルールと教育体制を構築する。